

甦へる學園に 續々と復學

再建の意氣も新に

昭和十八年學徒出陣の事やかな聲に送られてベンを拋棄し、烈々の愛國心に燃え空に海に或は陸に軍の中堅として活躍して來た學徒出身の將兵は終戦となり、それも祖國敗北の悲惨な現実に打ちひしがれて暗たんたる氣持を抱いて僥員として來た、然しながら學徒として

の如き情勢のまま、推移すれば業半にして退學の止むなきに至る者讀出すべき状態とならう、卒業を一日も早くの聲は深刻である、ここに於て復員學生の有志は復員學生進學の運動を開始した、即ち復員學生の進學は文部省の指令不明瞭の爲め各學校夫々任意の処置をとり、本學に於ては「學生の實力不足」一當局よりの指令なし」を理由として総て原學級に復舊せしめるの処置に比か。

現任の大學は過去と違ひなくもその國家的意を尊重し、學校は學生を愛し、學生に愛され、だが敗戦は我が國の再建に努力する様でなくてはならないのである、

此れに對し復員學生は當局に理解ある措置を要望、旧國有志懇談會を聞き、職校學生に卒業証書の授與、各學年共一學年宛進めて復舊せしむること等の項目を提出したが遂に容れられなかつた。三月再度これを提出、守屋學生課長の理解ある態度により當局も之を諒し、現在の二年の復學者は三年に進學し得る事となり、三年の學年試験は同時に終つての課目に亘つて行はれることとなつた。昨年並びに一昨年海軍豫備學生、陸軍特甲隊として入隊し今度復學した現三年も四月卒業の願ひを提出したが此は退けられ結局卒業は今年の秋となつた、社會は涙油として居る、生き残つた復員學生の使命は重大である

中樞會研究室

敗戦が日本國民に眞理の慈はるべきことを教へたとするのは皮肉でもあり悲感でもある

學問の自由が失はれて年既に久しい、自由なき所に創造はあり得ない、創造なき文化團體の一つである研究室又存在の價値はなかつた訳である、今後の本研究室の動向は法學それ自身の存在意義を求めつ、それを通じて委員相互の人格陶冶、高き教養人を自指して再生することにある、既に発表せる春季教養講座はそのさ、やかな贈り物であり講座に秘められる種々の立案又その現れに過ぎない、世の知識人階級の挽回を得れば幸ひ

學生の慶

圖書館の非禮

近頃圖書館における學生の態度は全く墮落そのものである、着帽したまの、高聲で私語を交すもの、果ては煙草を吸ふもの、圖書室のか休室なのか分らないこれは勿論學生自体の責任であるが一方には又圖書委員のルースにもあるのである、學生諸兄の自覺と圖書室當局の善処方を切望してやまない(M.P.)

勤勞報償金如何候や

終戦後勤勞報償金支拂に関する新聞公告を